

To see my reminiscence thro' your eyes  
あなたの目を通して故郷を見る

## <Reminiscence（望郷）>を辿るためのパロール\_ダイジェスト

2020年9月12日 17:12

三浦様

初めまして、村上美樹です。（自己紹介略）

さて、私自身、自己紹介はしても、これから何をどう翻訳するのかと言う課題に対面した時に、三浦さんのことを知らない限りにはどこから掘り始めれば良いのかわからないのが現状です。

三浦さんの研究されていることのお話などお伺いしたいです。

緊急事態宣言期間中に、「急に具合が悪くなる」を読みました。九鬼周造の研究をされている宮野真生子さんと食文化から文化人類学を研究されている磯野真穂さんのメール文通のやり取りが書かれている本です。私の中での研究者の人物像がそのお二人によって構成されてしまっていて、少しずつ三浦さんとお話するところから始めて、今回の企画に関するディティールを探していけたら良いなと考えております。

村上美樹

2020年9月12日 23:02

村上さん

はじめまして、メールありがとうございます。三浦です。

私の方も簡単な自己紹介をしておきますね。

三浦隼暉（みうらじゅんき）と申します。普段は、17世紀ヨーロッパの哲学者である G. W. ライプニッツ という人の思想を通して、世界の有り様について考えています。

具体的な研究内容としては、ライプニッツが「この世界の最小の構成要素は生物である」というようなことを言っているのですが、その意味について考え続けています。

もう少し個人的な話もしておきます。趣味として音楽がけっこう好きです。楽器の演奏も好きで、ギターをやったり、吹奏楽部でパーカッションをやったり、大学時代は和楽器のサークルで箏をひいたりしていました。アンビエント音楽とか、ポストクラシカルといったジャンルをよく聞きます。あと青葉市子さんという方のファンです。

宮野さんの本も時間があればちょっと読んでおきます。

ぜひ最初に少し話したいのが、私と村上さんにとって「テキスト」とは何かということです。

私は文献を解釈するという仕事をしている研究者ですのでテキストへの向き合い方もある意味では独特だと思います。芸術作品を作る人にとってのテキストも同じように独特なのではないかと想像します。

そういった二人が、テキストについて一緒に作業をするというのは、なかなか難しいことのような気がしますので、とりあえず準備として是非「テキスト」について話し合えればと思っています。

2020年11月21日 17:18

爆笑しながら目が覚めた 哲学研究者 三浦さん

先日のミーティング参加ありがとうございます。たくさん情報をいただくと同時に佃さんとの会話も興味深く聞いておりました。

今回の企画の話に戻ろうと思います。

とはいえ私も生き物なので長い時間軸の中の今からどうしたいのかの動きを三浦さんにお伝えする形となってしましますが・・・

梅邑のおじいちゃんの話のあらすじ。

天理市でそう言った外的目的性の目的に欠けてしまったものや、内的目的性が含まれてしまい捨てるに捨てがたい物を募集していて、それらを模倣・模刻し、最終的には欠けてしまった理由を喋るオブジェを作ろうとされていて、新聞記事などでも多く取り上げられ、その1つの記事を見た私と同じ秋田県出身の86歳のおじいちゃん、梅邑勇さんが「協力したい」と声をかけてくれました。

梅邑さんのお宅に訪問すると梅邑さんが描いた絵がたくさん保管されていました。点数はだいたい40～50点くらい、薄いベニヤにアクリル塗料で絵が描かれており、それらの絵を1点ずつ見ていると、梅邑のおじいちゃんは押入れの中から詩が描かれた絵を出してきます。「これな、誰かが曲作ってくれるの待ってる」と。ここまでは以前お話ししましたね。それ以降その「待ってる」が気になって、その詩を歌にしようと決めました。

今は歌のメロディを秋田の美術大学に通っている大学院生に作ってもらい、作曲を福井に住んでいる同級生の友達に作ってもらっています。これらのアウトプットを実現する中で、童謡や、秋田のわらじ歌を調べていました。天理市に来てからクラシック音楽を流しながら（主にE・サティ）作業していて、メロディを考えてくれる日比野さんに相談した際、「雪の歌だからジムノペティっぽいイメージだなあ」と私は言いました。そしたら日比野さんは「クラシックと童謡は違う」と言う話を持ちかけます。そこで、色々調べたところ、「翻訳唱歌」と言うジャンルにたどり着きます。童謡の作曲家、日本の明治時代に生きた作曲家は西洋へ音楽を学びに行っていたりしており、「童謡はクラシックと遠い存在ではない」と言うのが結論なのですが。

そう言ったことを調べていく中で1つ気になった歌がありました。

翻訳唱歌「故郷の空」

作曲：大和田建樹 原曲：スコットランド民謡

元となったスコットランド民謡の曲は

Comin' Thro' the rye. 作詞：ロバート・バーンズ

Comin' Thro' the rye - 翻訳（引用：website”原曲で歌う海外曲-英語の愛唱歌”から）

1.

もしある人が、ライ麦を分けてやって来て  
ある人と逢ったとしたら  
ある人がある人にキスをしたなら  
叫ばなくちゃいけないかしら？  
女の子は誰でも自分の彼氏がいて  
私には誰もいないって言うけれど  
でも男の人はみんな私に微笑みかけてくれる  
ライ麦畑を分けてやって来るときに

2.

もしある人が、町からやって来る  
ある人と逢ったとしたら  
ある人がある人にキスをしたなら  
しかめ面しなくちゃいけないかしら？  
女の子は誰でも自分の彼氏がいて  
私には誰もいないって言うけれど  
でも男の人はみんな私に微笑みかけてくれる  
ライ麦畑を分けてやって来るときに

3.

その男の人たちの中に、素敵な人がいるの  
自分でもとても愛しているけど  
その人がなんていう名前か、家がどこかは  
教えたくないわ

女の子は誰でも自分の彼氏がいて  
私には誰もいないって言うけれど  
でも男の人はみんな私に微笑みかけてくれる  
ライ麦畑を分けてやって来るときに

この、'Thro'に地元の方言性を見出したのですが、スコテッシュは立派な言語で、英語とは少し違うスコテッシュと言う言語であるので日本の「方言」に該当するのかと言うと少し疑問を持っています。

ここから  
全く別の軸で動いている作品制作の話をしてします。

9月頃、秋田に行った大学の同期、藤本さんと会ってゆっくり京都を歩きながらギャラリー巡りしたりしてお話をしました。その時の会話はすごくいろんな話題をして逡巡しておりました。藤本さんは「まだまだ秋田にすることにになりそうだ。」と言い、私はその時決めに決めかねていて、「私もまだ京都にいるのかもしれない。」と言いました。藤本さんと別れた後、「藤本さんの目を通して故郷の秋田を見てみたいな、」と言う気持ちが湧き上がりました。湧き上がったらやらないと気が済まない性格で、藤本さんに事情を説明して、11月にコダックのインスタントカメラを送りました。そのコダックのインスタントカメラは撮り終えたら返送してもらい、現像しようと思っています。そう言った事柄の中から、翻訳唱歌の話を用いて、制作するであろう作品のタイトルだけ思いつきます。

「あなたの目を通して故郷を見る」と言うタイトルで、英語にしたい、と。しかも'Thro'を使いたい。  
そう考えて、色々考えているのですが、  
Thro your eyes, to see (my) hometown?.  
もしくは To see (my) hometown? 'thro' your eyes.

このhometownは私の求めている故郷ではなくて、故郷の言い回しに困っているところです。  
私の言う故郷とはもっと広義の、広範囲の故郷です。実家でも、町でも無く、あの大きな川やあの大きな山、あの景色、あの何もない音、だったりするのです。  
もし三浦さんの持っている言語の中でこれじゃないか、と言う言葉があれば助言願いたいです。  
気持ちとしては思慕、なのですが、思慕とは不思議なもので、訳すとlongingになるんですね。

秋田弁を喋れない秋田県出身の美術作家 村上美樹

2020年11月26日 14:36  
展覧会ラッシュで忙しい美術作家 村上さん

こんにちは。  
先日のミーティングはとっても楽しい時間でした。全然違う業界で生きている人たちの話を聞くのはいつだって面白いのですが、特に自分で「モノ」を作っている人には興味があります。

Comin' Thro' the Rye を聴きながらこのメールを書き始めました。

>ここまでは以前お話ししましたね。それ以降その「待ってる」が気になって、その詩を歌にしようと決めました。今は歌のメロディを秋田の美術大学に通っている大学院生に作ってもらい、作曲を福井に住んでいる同級生の友達に作ってもらっています。

おじいさんの作品に曲をつけてあげるといふ試みが今ちょうど進んでいるころでしょうか。待っているうちに内的な合目的性が宿った作品。昔から気になっているのは、こういう合目的性が成就することで、それを宿していたモノはどうなるのだろうかということです。内的合目的性は成就するべきなのだろうか、という問いに対して手放して「何が何でも成就するべきだ」と言うことができる自信がイマイチありません。

村上さんが楽しみにしているところに水を差すような言い方になってしまって申し訳ないです。ただ、あるモノの存在意義にまでなっているような内的合目的性が成就した後、そのモノがどうなるのか、何か変化してゆくのか、とても気になります。だから、ちょっと捻くれた方向からではありますが、曲の完成に私も期待しています。

> 藤本さんは「まだまだ秋田にいることになりそうだ。」と言い、私はその時決めに決めかねていて、「私もまだ京都にいるのかもしれない。」と言いました。藤本さんと別れた後、「藤本さんの目を通して故郷の秋田を見てみたいな、」と言う気持ちが湧き上がりました。

誰かの目を通して故郷を眺めるというのは、面白い試みですね。「故郷」とか「思い出」とか、そういった極めて個人的なものを、他者を通して感受する経験というのは稀有であるように思います。

個人というものが窓を持たない独立した実体なのだというルネサンス以降の西洋近世的発想なのですが、その文脈では、私的な記憶は私個人のものに終始することとなります。

それを他者に開いてゆく、あるいはさらに、社会に開いてゆくということは、どういった意味を持つのか。私の故郷というものは、他者の目を通して見た時にもやはり郷愁を伴うものなのかどうか、とても興味があります。これは以下で書くことにも関わりますが、「故郷」というのは、本当のところ自分の中にしか存在し得ないのではないかという気もしています（だからこそ、あえて他者に開くことが面白いと思うのです）。

> このhometownは私の求めている故郷ではなくて、故郷の言い回しに困っているところです。

私の言う故郷とはもっと広義の、広範囲の故郷です。実家でも、町でも無く、あの大きな川やあの大きな山、あの景色、あの何もない音、だったりするのです。

この部分を読んで第一に「タウン」とは何かということを考えました。そして、少し考えて、それは「制度」だろうと思ったのです。誰か自分じゃない人が、ここからここまでが a town だと決めて、人々はそこを the town と呼び始める。そういうものではないでしょうか。

だけど、村上さんが言いたい故郷は、誰もまだ気にも留めたこともないような草木や河原の石があって、そういったものによって構成されているもののように思います。

そういったものは、制度というよりも、むしろ景色や情景やイメージや像といったもの、哲学の言葉で言えば「表象」といったものの言葉で語られるのではないかと考えます。

それで、いくつか浮かんだ言葉を並べておきます。

#### ・ Homescape

「ランドスケープ」「サウンドスケープ」とか、いろいろ -scape を伴う語があるわけですが「ホームスケープ」という語は、少なくとも私が持っている辞書にはありませんでした。

ハナレグミという人の曲に「家族の風景」という曲があります。たぶんこれを英訳したら homescape になるんじゃないかと思えます。

この曲の場合は家庭内の風景が中心に歌詞で描かれています。それでも村上さんの言いたいことと関係があると思うのは、私が「故郷」というのを、さまざまな記憶の在り方のひとつの形態なのではないかと思うからです。

「郷愁的な風景」を伴う仕方では存在する記憶が故郷なのではないかとか。だから、その範囲が家の中だとか、野外だとか、都会だとか、田舎だとか、そういうことは捨象しても、「故郷」の故郷性は失われないのではないかと考えたわけです。

#### ・ Nostalgia

タルコフスキーの映画のタイトルでもあります。これは、もしかしたら記憶像の名前というよりは、そのときに伴う感情に付けられた名前かもしれません。

しかしながら、村上さんが他者の目を通してみたいのは、故郷の像（イメージ）なのか、それとも故郷の気持ちなのか、私の方では判断がつかねたので言葉を挙げておきます。

故郷を思う気持ちとはいったいどういうものなのか。ふと今思い出したのは、杜甫の「春望」という漢詩です。昔学校の教科書に載っていたような気がします。

「国破れて山河あり 城春にして草木深し」と詠むとき、彼はその土地に立っていたのだと思うのですが、もはや存在しない昔の風景を思い浮かべてノスタルジーを感じている。

郷愁ってそんな感じかななどと、想像してみたりしました。

・ Reminiscence

辞書だと「思い出話、回顧録」「回想、追憶」などと記載されています。

ゴッホのいくつかの作品に Reminiscence of the North というタイトルが付けられたものがあります。彼はオランダ生まれで、晩年はずっと南仏の方にいたのですが、その若い日の「北の思い出」を頼りに描いたのだと思います。

思い出の景色とか匂いとか、物語とか、そういうもの全部をひっくるめて故郷を思うときにこの語が登場するのではないかという気がします。だから個人的には村上さんの言いたい故郷というのは、これに近いのではないかという直観があります。もう少しこの言葉についていろいろ調べてみてもいいかもしれません。

いろんな人がそれぞれの重みでこの言葉を使っているのではないかという気がしています。

日向ぼっこがマイブームの哲学研究者 三浦隼暉

2020年12月3日 13:20

いつも優しくお返事をしてくれる 三浦さん

内的合目的性は成就すべきなのだろうか、という問いに対して手放しで「何が何でも成就すべきだ」と言うことができる自信がイマイチありません。

梅邑のおじいちゃんにその話をした時にすごく喜んでおりました。梅邑のおばあちゃんは昔、歌を歌うのが好きだったようで地元ののだ自慢で優勝するほど歌が上手かったようです。歌を作ると言う旨を伝えた時、「そうか～！出来たらおまえ歌えばいい。」とおじいちゃんが言うと、おばあちゃんは「もう歌えへんの。喉が潰れちゃってね。」と言います。

おばあちゃんは精神障害第2級を持っていて、不眠症らしいです。最初に行った病院のお薬が合わず、喉に支障を来したと言っていました。

おじいちゃんの思い描く内的合目的はどこまで続いているのか、というところを詳しくは聞いていません。

「待ってる」そこはどこまで待っているのでしょうか。曲になって曲が有名になる事までを含めているのか、もしくは、会話の中であったように、曲になって妻に歌ってもらうことまでかもしれないし、単に曲になることだけを求めていたのか、それとも本当は待って無かったんじゃないか、とか。どのくらいの気持ちで待望していたのか、というので成就できてるかどうかが見えて来る気がします。

故郷のいくつかの候補ありがとうございます。

> ・ Homescape

iPhoneの基本設定で言語を英語にしているのですが、調べてみたら"Kazokuno Fukei"でした。

リリックとしてこの言葉を多用してるからタイトルにした、と言う感じでしょうか。

> ・ Nostalgia

もしかしたら記憶像の名前というよりは、そのときに伴う感情に付けられた名前かもしれません。

しかしながら、村上さんが他者の目を通してみたいのは、故郷の像（イメージ）なのか、それとも故郷の気持ちなのか、私の方では判断がつかかねたので言葉を挙げておきます。

郷愁の気持ちは十分持っているのですが、

おそらく見たいのはきっと「藤本さんから見た秋田の風景(イメージ)を見たい。そこはきっと私の"故郷"であることに間違いはないはずだ。」(これは予測でしかありません。)と言う、曖昧な故郷像なのかもしれません。

> ・ Reminiscence

だから個人的には村上さんの言いたい故郷というのは、これに近いのではないかという直観があります。もう少しこの言葉についていろいろ調べてみてもいいかもしれません。

いろんな人がそれぞれの重みでこの言葉を使っているのではないかという気がしています。

初めて見ました。良い絵ですね。

梅邑さんが雪の詩と絵を書いたこと、そのタイトルが「望郷」だったこともあり、藤本さんに秋田の写真を撮ってもらうこともあり、自分で雪の絵を描こうと思っております。そして興味深い言葉でもあります。少しこの言葉について考えてみます。何よりゴッホが好き。

別言語での翻訳に関しては'Thro'から方言性を感じたので、梅邑さんの歌詞をスコティッシュに翻訳してみる、というのを考えています。それには日本語から英語にまず一旦翻訳する必要がある、との佃さんのアドバイス頂いたので、まず英語の翻訳から入ります。

要点をまとめて私が今回の企画ですることは

- ・梅邑さんの書いた詩を作曲し曲を流す
- ・藤本さんの目を通して秋田を見る
- ・藤本さんの写真を参考に雪の絵を描く
- ・梅邑さんの詩をスコティッシュに翻訳してみる

の4点です。

これらはもしかしたら全部仕上げることは難しいかもしれませんが、でも、それらは全部やりたいことなので、やってみます。

今ちょうど天理駅に着いた京都の美術作家 村上美樹

2020年12月12日 15:22

やりたいことが次々と湧いてきて愉しそうな美術作家 村上さん

社会で生きる一人の人間として、自分は一体何をすべきなのか、あんまり答えのない日々をぼんやりと過ごしているばかりです。

>おじいちゃんの思い描く内的合目的はどこまで続いているのか、というところを詳しくは聞いていません。

「待ってる」そこはどこまで待っているのでしょうか。

もうすぐ曲が完成する流れになっている頃でしょうか。いったどんな曲が出来上がるのか気になっております。

素敵な詩ですね。「あの日の雪ん子」はどんな姿だったんだろう。

真っ白な雪だけになると、普段は見えない存在者の姿も見えてくるのでしょうか。色だらけ、凹凸だらけの世界では気付かないような微かなものが、滑らかな雪の上に立ち現れる。ありそうなことです。

「あの日の雪ん子」にもう一度出会えるような音楽ができれば美しいかもしれませんね。

もしかすると、音楽がつけられて初めて、おじいさんの作品が内的合目的性を持ったものになるのかもしれないとも思いました。

それ自体で完結していて、ただ自分の美しさで成り立つような作品になるような。

梅邑さんが雪の詩と絵を書いたこと、そのタイトルが「望郷」だったこともあり、藤本さんに秋田の写真を撮ってもらうこともあり、自分で雪の絵を描こうと思っております。

「望郷」という日本語は、Reminiscence と重なる部分が多いかもしれませんね。

秋田の写真を絵にする作業、これもとても楽しみです。村上さんは一体どんな絵を描くのだろう。

>別言語での翻訳に関しては'Thro'から方言性を感じたので、梅邑さんの歌詞をスコティッシュに翻訳してみる、というのを考えています。

方言性ということについて、なんだか少し気になり始めました。ある国が公用語を制定したさいに、そこから漏れてしまった言葉たち。ちょうど自分がこれから考えたいと思っていた問題にも関係しています。

まだ応募ただけで採用の結果は返ってきていないのですが、来年の夏あたり、ポストコロニアリズムについて学会で発表しようと考えています。

主流とされる文脈から外れてしまった国や人々の政治・経済・歴史・生命は、いったいどのような言葉で語りうるのでしょうか。誰の言葉で、誰の目で。

そういうこともあって、スコティッシュへの翻訳ということについても、大変興味深く思います。大した力にはならないかもしれませんが、できる限り協力させていただければと思います。

今年やり残した仕事を片付けなきゃなーと思いつつ蜜柑を食べる哲学研究者 三浦隼暉

2021年1月17日 19:14

オブジェクトの声を聞く旅から帰ってきた美術作家 村上さん

お元気でしょうか。

先日の天理市でお会いして、いろいろ聞いたり聞かせたりしまして、お忙しいところ本当にありがとうございます。他のところでもすでにお伝えしたように思いますが、行ってよかったと心から思える旅でした。村上さんという人間、それに村上さんの作った作品の一端に触れることができ、とても嬉しかったです。

元来私という人間は、気になった人をどこまでも理解したいという気持ちが非常に強くて（哲学者を研究している理由もそれかもしれません）、それもあって、もしかしたら失礼な質問までしてしまったかもしれませんが、その辺りは許していただけると嬉しいです。

天理にてお蕎麦を食べながら書き途中のものをお見せしたエッセイが、さきほど書き上がりましたので、このメールに添付して送ります。

「決然とした声を私が聞くとき：村上美樹「オブジェクトの声を聞く旅に出ること」のための小論」というタイトルで、

現前とか現実化ということを考えながら、いかに村上さんの作品が決然としていたかを述べたものです。

とんでもなく長くなっちゃったので、時間のあるときに眺めてくだされば結構です。

なんの仕事でも強制でもない文章を書くのは久しぶりだったので、すごく楽しかったです。

明日、明後日あたりで図書館に行って、雪の詩などについて調べようと考えています。

今のところ、日本の古典作品を英訳したものを中心に探してみようかと思っています。

特に『北越雪譜』という江戸後期の本の英訳書、『古今和歌集』の英訳書あたりで、雪に関する記述を探したら何か得られたりしないかなと思っています。

この点に関して、もしどこかで時間が取れば、具体的にどういった英語を探しているのかなどオンラインで話あえればいかなーなどと考えています。

村上さんの声を聞く旅から帰ってきた哲学研究者 三浦隼暉

2021年1月18日 16:43

夜行バスでご自宅まで戻られた元気な哲学研究者 三浦さん

三浦さんとお話しできて私もすごく楽しかったです。

自分の作品制作は無意識な選択をしていて、その選択における理屈を三浦さんは読み解いてくれるのですごく感銘を受けました。

最初お蕎麦やさんで読ませていただいた時は、作品の〈モノ-コンセプト〉の部分でしたので、そこからどう広がるのかワクワクしておりました。全て読みました。こんなにも自分の作品について考え、読み解き、文章を書いてくれる人がいることに対して喜びを感じます。

博物館に展示されている展示品はあらゆる古い道具などが記録として残されています。天理市に、星塚古墳と言う古墳があるのですが、そこで木製の笛が出土されています。実際それを見たことは無いのですが、なぜ「笛だ」と判断できたのかが不思議で。本当に吹いたのかな、もし吹いたのならその笛はどんな音をするのかな、その笛を吹いた先にはどんな空気が出るのかな。最初はそういった疑問から始まりました。（どの人にどんな話をしたのか最近では頭の記憶が満杯で覚えておらず、同じ話をしていたらごめんなさい）そうして市民の方に協力をいただいて、使われなくなった、捨てるに捨てがたい道具探しの旅に出ます。

現在私は英語で snow song poemなどと検索して、自分のボキャブラリーを増やしています。

手指先が凍っておばあちゃんみたいになりそうな美術作家 村上美樹

2021年1月20日 1:04

ものすごい速さでスマホに文字を打ち込むことができる美術作家 村上さん

私の拙い小論を早速読んでいただけたようで大変嬉しく思います。無意識に選択して作品を作ることができるという、美術作家としての素晴らしい才能の、少なくとも邪魔にならないようなものが書けていれば幸いです。

今回の作品制作が博物館から始まったという話をきいて、なるほどと納得いたしました。何でもモノがあるときには、そのモノに付随するたくさん理由があるはずで、実際にその理由をリサーチする前には必ずそれをめぐる様々な想像もあるわけですね。「オブジェクトの声を聞く旅に出ること」が、いかに博物館的展示とは異なる美術的展示なのか、という点はもう少し考え続けたいです。博物館にもレプリカはあるし、もしかしたら声が出てもいいかもしれない...あるいは、博物館と区別する必要はそもそもないのだろうか、などなど。

あと、「翻訳するディスタンス」の展示に関連して、故郷や方言といったことについてもう少し考えを深めたいと思っています。たぶん直接には今回の英訳に影響を与えることはないと思うのですが、非常に興味深いテーマなので気になってしまいます。哲学というのは大体いつも普遍的な事柄を扱うので、ある特定の場所としての「故郷」や、そこに特有の「方言」のようなものはどうしても手から溢れてしまうのです。その一方で、人間の生きていることは、すごく特殊で局地的なので、そこを語り落としてはいけないだろうとも思うのです。うーん...悩ましい...

歯医者さんで歯磨きを褒められて嬉しくなった哲学研究者 三浦隼暉

2021年1月24日 15:15

私の拙い英文に添削をしてくれている三浦さん

ありがとうございます。私自身英語使うことに自信がないので見てもらえるのすごく嬉しいです。毎朝起きて大きい板を見て、大きい板を見て寝る、こんな間に合うのか、全然予想がつきません。藤本さんからもフィルムカメラを受け取って今現像データ化中です。楽しみ。

レッドブルを飲んで気持ちを奮い立たせる美術作家 村上美樹

1月24日

メールを送った後三浦さんからLINEが来て、ビデオ通話することになった。

私は英文を眺めつつ、すこしいじりつつ、そのかたわら、広報物に使うことにした三浦さんのメールでのやりとり累計5万5千字の文字を、広報物として作りやすくするためという理由と、おそらく読んでくれるであろう鑑賞者のために、2万字に減らそうとしている。三浦さんはコツコツと新古今和歌集の英語訳を読んで調べてくれていた。

梅邑さんの詩や会話は考えれば考えるほど矛盾や誤植がある。

あの日の唐松。調べてみると唐松は関東中部に主に繁殖する松だった。

曖昧な記憶で立ち上がっている詩。

「そこが<Reminiscence>なんだよね」

唐松の英訳をPineにするのか、Karamatsuにするのか考えている上でふと気づいた

この翻訳とは一体誰に向けられているのか。もしこの翻訳作業が他人（鑑賞者）に向けられているのだとしたら、梅邑さんにも向けられているもので、英訳からスコッツに翻訳してもらい、梅邑さんに見せても梅邑さんはなんのこっちゃさっぱりだろう。それと同じで、鑑賞者もきつと、なんのこっちゃさっぱりだろう。

ハッキリ言う。これは、自分自身が「望郷」するということ、

今私は、秋田を「故郷」たらしめようとしている。

2021年1月26日 1:06

大きな木の板に向かって立ち向かってゆく美術作家 村上さん

以下、「望郷」とか Reminiscence をめぐって、なんとなく考えている話を書きます。

「生きていること」のものすごく近くに「経験すること」があります。生きていると何かを経験しますし、何も経験せずに生きることはできないでしょう。

同じように、何かを思い出すということには必ず、経験するということが伴っていて、経験したことだけが思い出されうることです。

経験するということには、記号的経験と直接的経験があります。前者は、何かを介して経験することで、本を読んで喜んだり悲しんだりするのも記号的経験でしょう。

記号は保存したり共有したりできるので便利なのですが、それによる経験は、その記号を見る人の再生装置である想像力に依存するものでもあります。

記号→見る人の想像力→記号的経験

直接的経験の場合、想像力は入り込んできません。まさに目の前にあるものそれ自体を掴み取るというときに、そのような経験が成立します。

追憶、何かを思い出すことは、すでに経験したことをもう一度経験することです。このときどうやって経験しているのか。

直接的経験は、原理的に保存され得ないので、追憶はつねに記号的経験ということになります。記号化された過去を、現在の私が想像力という再生装置によって、読み取る作業です。

だから、「何らかの松」の記号を想像力が読み間違えて、唐松が想起されたりするのだと思います。

今回の展示の話につなげます。

第一に、方言ということに結びつけると。

方言とは、それを使う人々の「生きていること」にぴったりの言語のことだと思っています。

言い換えれば、記号化ということのを逃れようとする言語のことなのではないでしょうか。

「望郷」のスコテッシュへの翻訳というのは、追憶の直接的経験を取り戻す実践として理解してもいいのかもしれませんが。

(ちなみに私の研究しているライブニッツは記号化の権化みたいな哲学者なので、もしかしたら今回はライバルかもしれません。あるいは和解の道がどこかにあるか...)

第二に、村上さんの大きな絵に結びつけると。

小さな絵でも良いところを、自分よりも大きな板を選ぶところに、あいかわらず村上さんの決然さを感じています。

小さな絵というのもやはり記号でしょう。

逆に、原理的に保存され得ない直接的経験による追憶を可能にしようとする試みが、自分よりも大きな絵につながっているのではないかと思うのです。

直接的に出会う経験はいつも自分よりも大きなもので、自分にとって全部一挙に掴み取れるようなものではないのでしょから。

原理的に保存され得ない直接的経験をもって追憶に向かう、ということは普通は無理なのですが、しかし美術作家ならば、という期待を抱いたりします。

-----

以上が、昨日の夜、夢と現を行き来しながら考えていたことでした。

まとまりのないメモのようなものですが、今のところの私の考えです。

もうすこし時間をかけて思考を整理したり、言葉にするための概念を手に入れたりしたいと思います。

毎日新聞の村上さんの記事をみてスヌーピーの笑顔を思い出した哲学研究者 三浦隼暉